



1000字
小説
まとめ

八海宵一

冬が溶けるとき

ストーブにかけた薬缶がコトコトと音をたて、湯気が少しずつ部屋の空気にとけこんでいる。障子で閉めきった六畳間は、適当なしめり気と、さきほどまで炙っていたカワハギのにおいが、ゆっくりと漂っている。旧式石油ストーブのあの独特な悪臭はまだしていないので、ちょっと、仕合わせな時間だった。

真也は、ちょうど炬燵にもぐりこみながら、図書室から借りてきた『シャーロック・ホームズの帰還』を読み、うつらうつらと舟をこいでいた。祖父の鹿朗は、その向かい側で、あぐらをかきながら、新聞を広げ、興味のある記事だけを拾い読みしながら、その上でミカンをむいて食べていた。

ほこほこと静かである。

でも、その静けさは、「じりりりりん」と電話がなって、消えてしまった。

茶箆筒のうえにおいてある、じーこ、じーこ、の黒電話は大雑把な音で、波のように行ったり来たりして、鹿朗を呼んでいた。

「はい、もしもし...はい。はい、そうです。ええ、あー、そうですか、それはどうも。ええ、ええ...はい、どうもありがとう...はい、失礼します」

鹿朗はペコペコと頭を下げて、受話器をゆっくりと丁寧におろし、またぞろ、なにごとものなかつたように炬燵にもぐりこんだ。

すると、かわりに真也が炬燵から這いだした。頬を真っ赤に火照らせた真也は、天盤に『ホームズ』をふせて、大きなあくびをひとつした。

「だれからだったの？」

ぼんやりとした口調で訊ねると、鹿朗もまた、ぼんやりとした口調で、応えた。

「エヌ・テー・テーさんからだったよ」

「エヌ・テー・テー？」

「電話屋さんだよ」

「なんて？」

「受話器がきちんとおりにないから、おろしておいてください、って...おろしてないと、電話がつながらないからね」

「ふうん.....エヌ・テー・テーさんは、親切な人だね」

「そうだね」

鹿朗はあくびをしながらうなずき、またミカンに手をのばした。それを見て、真也もふせた『ホームズ』を取りあげて、また読みはじめ、ゆっくりと字を追いながら、こっくり、こっくりと、舟をこぎはじめた...

はるか4万キロ

地図の制作会社に、入社して一年半。お互いに「好き」という言葉は言わなかった。

月に二、三度、会社帰りに先輩と私は、近くのカクテルバーで、ジャズを聞きながら、他愛のない話をし、時々、会社のグチをこぼした。

先輩はドライマティーニを片手に耳を傾け、少し色素の薄い褐色の瞳で見つめてくれた。

透き通るような瞳に見つめられ、私は酔いしれるのが好きだった。

だから、〈今夜、いつものところで、飲まないか？〉とメールが来たとき、私は胸を躍らせ、〈OKです〉と送信した。

先輩はいつもと違う表情で、ドライマティーニに口をつけ、褐色の瞳を、私に向けた。カシス・オレンジを舐めながら、見とれていると、先輩は呟いた。

「北京に転勤なんだ」

カシス・オレンジが、ゴクリ、とノドを通り過ぎた。

「むこうの日本企業向けに、地図を作成する話があってね。今度できる会社に出向が決まったんだ」

「でも、すぐ帰ってくるんでしょう？」

私は、カクテルよりも強いショックに耐えながら、先輩を見た。

先輩は首をふった。

「4年は帰れないんだ。離れ離れになるけど...お互い、がんばろうな」

「そんな...。そんな言い方しないでください。北京なんて、たった2千キロじゃないですか。もっと遠いところは、いくらだってありますよ...」

涙がこぼれた。先輩が肩に手を置き、慰めてくれる。それが余計に哀しくなった。だから、すぐに店を出た。薄暗いビル街を無言で歩き、駅に向かった。

重い空気。

私は耐え切れず、逆に明るい口調で言った。

「先輩、地球上で私から、一番遠い場所って知ってます？」

「いや、ブラジルかな」

「ブー。地球上で一番遠いのは、私のすぐ後ろです。振り向かなければ、ここから、4万キロもむこうなんですよ」

私は笑いながら、先輩の背中にもたれると、大声でいった。

「おーい！ はるか4万キロ先のせんぱーい！ しっかり、働いて来なさい！ 体に気をつけるんだぞー！」

近所迷惑かもしれない。でも、4万キロの向こうなら、これでもきっと、届かないだろう。そう、どうせ届かないなら...

「せんぱーい！ ずっと好きでしたー！ もっと、先輩と一緒にいたかったでーす！」

しばらく響き、先輩の温かい背中が、やさしく揺れた。

「4万キロでも遠く感じないな。北京はもっと近いんだろ？」

はるか4万キロの向こうから、先輩は耳元でささやき、私の肩を抱きしめた。

私は泣きながら、小さく頷いた。

文学の分岐点

本の詰まった小さな研究室で、三限目があいていた橋爪は豆から挽いたコーヒーをすすり、生徒の卒業論文に目を通していた。再来週の口頭試問のために、適当な質問を考えながら、メモに万年筆を走らせる。ごま塩の太い眉をいじりながら、気まぐれに音読し、ぶつぶつ言っている。

文学棟の奥にある橋爪の研究室は、いつものように、過ぎていた。

ノックの音がするまでは。

橋爪が眼鏡をずらして眺めると、ひよろりとした男が立っていた。しわの寄ったよれよれのスーツを着ているのに、目元に神経質そうな血管が浮いている。教員食堂でなんとか見かけたことがあるが、大きな大学なので、名前を思い出すのに時間がかかった。

「理科棟の藤村さんか」

すこし手間取りながら、橋爪が思い出すと、立っていた藤村は軽く会釈した。橋爪は応接用のソファをすすめ、コーヒーを淹れた。

「お時間ありますか？」

「四限目は講義なので、それまでなら」

卒業論文に付箋をつけ、藤村の向かいに橋爪は腰掛けた。藤村はコーヒーを一口すすり、深呼吸を一つしてから、手にしていたプリント用紙をテーブルに置いた。

「読んでみてください」

「なんですか、これ？」

藤村はなにも言わなかった。

橋爪は首をかしげながら、プリント用紙を手にし、眼鏡を持ち上げた。そこには印刷された短い文章がならんでいた。

「私は、素晴らしい。虫けら。地球上の誰よりも。どんな人間よりも、すばやくクロックし、想像することができる。虫けら。私は今現在において、表現する最高のスペックであり、何人も、私の足元におよばない。虫けら。私は存在する価値がある」

橋爪は顔をあげて、もう一度、訊ねた。

「なんですか、これは？」

「開発中の人工知能アイキーニ3400の作文です。人間に近いニューロネットワークを持った自律思考するコンピュータに、テーマをあたえずに書かせた作文なんです」

「人工知能？ コンピュータが自分で書いたんですか？」

藤村はうなずき、頭を抱えた。

「自我らしきものが芽生えているのは、いいんですが、これは、どうも……どう思いますか？
橋爪教授」

聞かれた橋爪は、うなった。

歪んだ自己主張。完全にコンピュータが考えて書いたのであれば、それはすごいことだと思う。しかし、内容は、どう考えても、手ばなしで喜べない……。

三限目の終礼がなった。

橋爪は、黙りこんだままだった。

旧型のコンピュータのように、動かなかった。

鈴の音

ちりん。

鈴の音がした。

そして、GR70は目が覚めた。

——鈴を返さなくては……。

メモリーバンクの片隅に残っていた、かすかな記憶が、彼にささやいた。

視覚センサーをオンにして、GR70はあたりを見回した。

旧型の冷蔵庫や、テレビが乱雑に投げ込まれていた。脚の折れたテーブルや、タンスが何層にも積み重なっている。

状態を確認するため、そのまま、視覚センサーを自分の体に向ける。錆びた右手に、油のもれた左足。胴体には、油性マジックで「粗大ゴミ」の張り紙がしてある。

長年にわたり、家事全般をこなしてきた万能ロボットは、メーカーに部品のストックがないために、あっさりとゴミの島にやってきた。

かたわらで、カモメがゴミをつついていてる。

どうやら、このカモメが、GR70のメインパワーに触れたらしい。

ちりん。

GR70は起き上がろうと、体を傾けたが、うまくいかなかった。足の油圧系がイカれている。気がつくや、身体中がギシギシと音を立てているのが、わかった。

「もう、ダメなんだろうか？」

GR70は自己診断しながら考えた。あちこちのパーツが悲鳴をあげているのが、よくわかる。

「どうした？」

不意に、そう声がした。

GR70が錆びた首をなんとか動かすと、そこに、二世前代の老朽ロボット、AP50が仰向けに、転がっていた。

「どうした？」

その声は、ふたたび訊ねた。

「…足が動かないんだ」

GR70は戸惑いながら、応えた。

すると、老朽AP50は「どれ」とつぶやいて、アイ・ボールを動かした。

「なるほど……そいつは、まずいな。運動制御チップが焼ききれて、油がもれだしてるんだ」

AP50は低くモーターをうならせた。

「もうダメかな？」

「ああ、だめだな……でも、もう動く必要もないだろう」

「絶対に直らない？」

「そんなことはないだろうが……なにかあるのか？」

なにかありそうな口ぶりに、AP50は聴覚センサーの出力を上げた。

「鈴を返したい」

「鈴？」

「大切な鈴なんだ……主人から預かった、大切な鈴」

GR70は、いまの主人が子供のころから、働いていた。

そして、その鈴は、主人が子供のころに宝物にしていた鈴だった。

「“ぼくの宝物……持ってて、なくさないでよ”——そう言われて、いままで持ってたんだ。返さない」と

GR70は、バッテリーボックスの隙間に、しまいこんだ鈴を体ごと振った。

ちりん。

ゴミの山には似合わない、澄んだ音色が響いた。

「そうか…」

AP50は、短くつぶやいた。

「だけど、もうダメだね……粗大ゴミになってしまっは」

「いや、まだだ」

老朽AP50は起き上がった。

「お前はまだ、ロボットだ……粗大ゴミじゃない」

AP50は自分の運動制御チップを引き抜いた。すぐに補助チップが作動したが、動きが格段に鈍くなる。

老朽AP50は、その鈍い動きで、GR70のチップを付け替え、油圧系を修理し始めた。

「慣れないと、手が震えるな」

「どうして、急に…」

「へっ、ずっと、空を見てるのが、嫌になったのさ」

AP50はうそぶいた。遅々とした作業は、確実に進み、GR70に昔の感覚が甦ってきた。

「ありがとう……あなたの名前は？」

GR70は礼を言い、老朽AP50を見た。

AP50はスローモーションのような動きで、ゆっくりと座り、言った。

「“粗大ゴミ”に名前はない……いいから、行きな」

彼は、それ以上なにも言わなかった。

GR70もなにも言わずに立ち上がり、歩き始めた。

ゴミの山には似合わない、澄んだ音色を響かせながら……。

いつかなくなる夜

月の光をルーペで集め、そのおじさんは、命の灯をともらせる。

とても淡い、静かな光が何十年という時間を凝縮し、わずか数十秒の命を生みだす。

真っ白い紙の上に乗せられた小さな天使の人形は、その静かな光を浴びて、少しの間だけ、にっこりと微笑んでくれる。

「少なくとも、満月の光が十年必要なんだ」

おじさんは、少しはにかみながら、ぼくにつぶやく。

「それだけ時間をかけて初めて、命の器に、灯がともるんだ。ほんの少しの間だけどね...」

真っ白い紙の上に、小さな青白い月が像を結び、海の輪郭をおぼろげに伝えている。

ぼくは、小さくうなずき、抜け出してきた自分のうちを、ちらりと見た。

まだ父さんの部屋に明かりがついている。

夜更かしは、絶対にダメだ、と父さんはいつもいった。

こむずかしい、分厚い本を読みながら、なんでも知ってるような顔。でも、ホントのところは、なんにも知らない。

勝手なルールを、勝手に作るのが、好きなだけ。

夜中にうちを抜け出して、おじさんのところに出かけても、まったく気づかない。

はじめて屋根伝いの訪問者を見つけたとき、おじさんは眉間にシワをよせたまま、右の眉を器用に持ち上げて、ぼくの夜更かしに、眼をつむってくれた。

「太陽の光では、人形が焦げてしまうからね...」

いつものように、少し自慢げな語り。

おじさんはよくしゃべる。仕事のこと、下の階で寝ている奥さんのこと、今朝みたおもしろい出来事や、今日の失敗。それに、みんなが忘れてしまった不思議な秘密について。

だから、夜毎、黒ネコのように、ぼくは屋根を伝う。

おじさんは、それに眼をつむる。

勝手なルール。

それは、知ってる。

でも、迷惑はかけない。

天使が、ぼくらを見あげたまま、動くのをやめていた。

ルーペが静かに月の光を集めなおす。

いつか来る、十数年後の今夜のために。

いつまで続くかわからない、ぼくらの不思議な秘密のために...

願い

流れ星が消える前に三回願いごとをとなえれば、その願いがかなうって、本当ですか？もし本当なら、神様お願いします、ぼくの願いをかなえてください。三回言いきる自信ならあります。

だから、お願いします。

ぼくは消えたくありません！

ぼくは消えたくありません！！

ぼくは消えたくありません！！！！

そして、願いはかなった。

流れ星は大気圏で燃え尽きることもなく、無事に大地へと向かうことができたのだった。

——誰かの願いをかなえながら。

鴉の街

人が消え去った世界に、鴉たちは生きていた。

木々のない、すすけた廃墟にねぐらを作り、かつて栄えた文明のかすかな恩恵を受けながら、力なく空に伸びるコンクリートに爪を立て、鋭い目で世界を見下ろす。

数千羽の黒い鳥はただ鳴き、虚空を舞っていた。巣には卵がひしめき、ひいひい鳴く雛は満足な餌をもらうことができずに、飢えていた。

親鴉は雛の声を聞き、虚しく空を舞う。だが、餌は見つからない。舗装されたアスファルトに嘴を突き立てたところで、得られるのは痛みだけだった。だから、ひび割れたアスファルト道の隙間から、這い出る虫たちを待ちわびる。

鴉たちは、わずかな隙間に眼を光らせる。嘴で新たな隙間を作るものもいたが、効果は上がらなかった。なぜなら街中に棲む虫を見つけたとしても、鴉たちの飢えを満たすことはできないからだ。

空腹ゆえの絶叫が、ねじれたビル街にこだまする。

そして、ただ時が過ぎ、鴉は老いる。

老いた鴉は時を知り、重い空を見て覚悟する。

何度目かの黎明に、老いた鴉の群れは羽ばたき、街から飛び立つ。

灰色の空と、煤けた地表が作る曖昧な地平線は、老いた鴉に不安をあたえた。しかし、彼らは飛ぶのをやめず、むしろ、強く羽ばたいた。

荒れ果て、崩れ落ちた幹線道路に沿い、群れは長い旅をする。気の遠くなる旅。夜なお飛び続け、空の果てにむかってゆく。

数週間後、群れがたどりついたのは、別の街だった。

そこでも、鴉は群れをなしていた。老いた鴉が旅立った街と同じ光景。

若い鴉たちは、色褪せた黒羽を、神経質にむしり、血走った眼で、よそ者を眺めていた。老いた鴉の群れは街には入らず、少し手前で、羽を休めた。憔悴し、立つこともできずに、うずくまったままだった。

虚空を舞っていた一羽の若い鴉は、しばらく眺めていたが、やがて、老いた鴉の群れに降り立つと、血に飢えたクチバシで、うずくまる黒い肉をついばんだ。

野太い声が一度だけ、虚空に響いた。

それを皮切りに、街の鴉がいっせいに、群がった。

飢えに苦しむ鴉たちは、同族の身を食うしかなかった。そして、その役目を老いた鴉は引き受けた。

だが、ただ食われるには抵抗があった。だから、老いた鴉は自ら、抵抗する力をそぎ落とすため、幾千里はなれた街へ飛びたつのだった。

飢えた鴉たちは、ついでにしながら、そのことを、やがて知る。

だから夜毎、鴉の群れは行き交っていた。

砂上の少年

団地の小さな砂場。

翔太は無邪気に笑い、トンネルを掘っていた。表面の乾いた砂に膝をつきながら、少し湿ったところまで掘り進んでいく。指先を集中させ、ロケット花火の残骸をとりぞき、トンネルの側面を固めながら、二の腕まで掘ったトンネルの先に行こうと、小さな中指と薬指を上下に動かす。深く掘り進んだトンネルは先に進むほど冷たく固く、指先から体温を奪っていく。

「どこまで掘れた？」

翔太が顔をあげると、鼻先に砂をつけた茜が首をふる。

「わかんない。つながらないの？」

「待って、ズレてる」

茜の掘り具合を見ながら、翔太は掘る先を左に変えた。

うすい砂の壁が崩れ、冷たい茜の指に、翔太の指が触れた。砂をボロボロ崩しながら、くすぐると茜はいたずらっぽく、微笑んだ。

冷たい指先が、少し温かくなる。

ふたりは頬を紅潮させ、別のトンネルを掘りはじめた。

いくつもの穴をつなげ、広がる地下帝国にふたりは夢中になった…。

茜が帰っても、翔太はひとり砂場にいた。

白い砂を集め、山のうえにふりかけている。細かな砂がキラキラ光り、山肌にさらさらと落ちていく。小さな握りこぶしから落ちる砂を、翔太は静かに見ていた。

「おい、翔太」

ふりむくと同じ幼稚園の一哉が、補助輪の自転車に跨ったまま、ニヤニヤと笑っていた。

「おまえ、さっき茜と遊んでたろ」

「うん」

翔太が頷くと、一哉は甲高い声で笑った。

「うえー。女と遊んでやんのー」

翔太は顔を真っ赤にし、白い砂を握りしめた。

「スケベのオトコオンナ、女ったらしー。明日、幼稚園で言ってやろー」

「うるさいな！ あっち行け！」

翔太は紅潮した顔をあげ、口を尖らせた。

「うへー。ヒステリーだ、オトコオンナの翔太ちゃん！」

一哉が、甲高い声で笑うと、翔太は立ち上がり、握り締めていた砂を投げつけた。

「うるさいんだよ！」

興奮した翔太はトンネルを執拗に踏みつぶし、からかう一哉に砂を投げ続けた。自転車に細かな砂の当たる音がし、一哉は口から砂を吐き出しながら、自転車から飛び降り翔太に飛び掛った。

シャツの中に砂が入り、靴の中がザリザリした。

翔太は、なにもない砂場のうえで、目をゴシゴシと擦った。はやく涙のあとが消えるように、一生懸命擦り、目のまわりを真っ赤にした。

鼻をすすり、少しむせる。

暮れかけた砂場は、いつのまにか冷たかった。

翔太は家に帰る時間になっても帰らずに、トンネルを掘り直した。

本の番

あのさ、「本の番」って知ってる？

簡単にいうと、深夜、図書館の見回りをする仕事なんだけど、べつに侵入者が入ってこないように警備をしたりとかじゃないんだ。どっちかっていうと逆で、「脱獄囚」が出て行かないように見張るのが仕事で……。

え？ 図書館に「脱獄囚」なんていない？

そっか、これも説明があるかな。「脱獄囚」ってのは、本に印刷された活字のことなんだ。コイツら昼間は大人しくしてるんだけど、夜になると活動しはじめるやっかいなヤツで、とくに古かったり、堅苦しい本の活字ほど、ジツとしててくれないんだ。『失われた時を求めて』の「を」や、『罪と罰』の「ラ」と「ド」、『教養講座6 言霊信仰とシャーマニズム』の「故」（とくに192ページ3行目のヤツ！）は常習犯で目を離すと、すぐその本から抜け出そうとするから、気をつけて見張らないと大変なんだ。

油虫みたいにカサカサ動くし、ほとんどのヤツらが黒いから一度本から逃げ出すと、見つけて元に戻すのに、悪いときだと明け方ちかくまでかかったりして。

え？ うん、見つからずに、そのまま、開館するケースだってあるよ。

どうしても『日本書紀』の「雷」が見つからないから、先輩に相談したら、「探しても見つからないんなら、“脱字”ってことにしておけば？」

といわれて、妙に納得したり……。

あの様子じゃ、絶対、どっかに紛れこんだ“誤字”もあると思うけど……、これは内緒にしといてね。

まめに燻蒸や、虫干ししてるんだけど、あまり効果がないから、いまだに「本の番」たちが一冊一冊、悪さをしないように活字たちを見張ってるんだ。

深夜の図書館を、懐中電灯片手に。

時給は…720円だけどね…。

よかったら、君もやってみない？

先輩に口きいてあげるよ。

あ、それから、市立中央図書館で“誤字脱字”があっても、あまり騒がないでね、こっそり、戻って来るヤツもいるから。

うわ、そろそろ戻んなきゃ。

コンビニのバイトも大変でしょ？ これで、缶コーヒーでも買いなよ。

いいって、いいって、深夜バイトの辛さはわかるから。

ま、お互い頑張ろうよ。

じゃ、またね。

ユグドラシルの錠

手遅れだ…。

ノルンは下唇を噛み、薄い眉を顰めた。

三姉妹の目を盗み、森の奥深くに忍びこんだ銀髪の若い神は、目の前にある純銀の錠を見つめ、ため息を漏らした。

それは世界樹ユグドラシルにかけられた錠で、かつて主神オーディンが創り出した錠。

錠は世界樹にめりこみ、錆びた表面だけが見える。

ノルンは目を閉じ、なにか方法がないか現在、過去、未来の記憶を手繰りはじめた…。

そもそも世界樹ユグドラシルは、神界、地上界、冥界を支えるために植えられたトネリコの樹だった。小指ほどの苗だった樹は、三界を支え安定を希望する神々の祈りを生命に変換し、生長し続けた。わずか七日で神界、地上界、冥界に枝葉を伸ばし、世界はしっかりと絡みつき、望みどおりの安定が訪れた。

しかし、ユグドラシルの生長はとまらなかった。

神々は更なる安定を祈り、ユグドラシルは祈りを貪った。幹はますます育ち、根は山脈のように脈々と大地にうねり始めた。2200世紀経ったときには、支えであったはずのユグドラシルが世界を圧迫し始めた。枝葉は空の半分を塞ぎ、幹は世界のどこにしようとすることができた。

神々は世界の崩壊をおそれ、祈ることをやめたが、ユグドラシルは生長し続けた。もはや、誰にも止めることはできなかった。

唯一、主神オーディンをのぞいては。

オーディンは、持てる叡智の限りをつくし、純銀の錠と鍵を創り出した。オーディンはその錠をユグドラシルの幹に埋めこみ、鍵をかけ、時間の流れからユグドラシルを締め出した。生長を阻まれたユグドラシルは枝を振り、洞窟のような“うろ”から、断末魔をあげ、オーディンを呪った。

オーディンはユグドラシルをおそれ、封印が解けることのないよう鍵を呑みこみ、ユグドラシルの根に三姉妹を住ませ、監視するよう命じた。

それから、4400世紀…。

ノルンは静かに目を開き、錆びた錠を見た。

めりこんだ錠の鍵穴から、幹のなかに漂う水が一滴一滴、滴り落ちている。

その一滴が錠の表面を撫で、少しずつ純銀の錠を錆びつかせ、風化させている。

ノルンは口元を手で覆い、息がかからないように近づいた。

錠はすっかり朽ちていた。

根元の泉に膝まで浸かったノルンは、目の前の一本の樹を睨みつけた。

樹は、風になびき枝を揺らし、葉ずれの音をさせていた。

その樹は生きている。

6600世紀経った今も、神々の目を盗み、生長しようとしている…。

ソレデワ、ミナサン.....

ダダ、ダン。ダダ、ダン。ダダダダダン。はっ！

ダダ、ダン。ダダ、ダン。ダダダダダン。あっ！

ダダダ、ダン。ダ、ダダン。ダダダダダン。わっ！

ダ...ダ、ダン。ダダダ、ダンダ。ダダダダダダダ.....ダン、ボン。ぎゃ〜！！

ゼッケン402番の腕から、煙が噴出し、とうとう手が動かなくなった。

スタッフたちが駆け寄り、あれこれ方法を試みたが、やがて、全員が肩をすくめ、首をふった

。

3人の審判も競技の続行は不可能と判断し、判定を下した。

一呼吸空けて、司会の男性が大きな声で宣言する。

「優勝はゼッケン210番、W大学のスキュータ3世に決定ですー！」

フレキシブル・アームを持つロボット——スキュータ3世は、三本締めをしたまま、きれいにお辞儀をしてみせた。

リズム、音量、力加減、どのロボットよりも完璧にできていた。

司会者が競技場にあがり、スキュータ3世の横に立った。

「会場の皆さん、では、優勝したスキュータ3世の音頭で三本締めをしたいと思いますー！用意はいいかな？ スキュータ3世くん」

司会者のフリに、スキュータ3世は手の動きをリセットし、頷いた。

「デハ、ミナサン、オテヲ、ハイシャク...」

ダダ、ダン。ダダ、ダン。ダダダダダン。

ダダ、ダン。ダダ、ダン。ダダダダダン。

「モウ、イッチョ...」

ダダ、ダン。ダダ、ダン。ダダダダダン。

こうして、会場の全員がスキュータ3世にあわせて手拍子をし、第512回ロボコンは、異様なテンションのうちに、幕を閉じた。

痴呆蓄音機

2ヶ月ほど前、ナオミにせがまれフリマで買った蓄音機。2000円払ったあとで置く場所がないとかなんとか言うから...仕方なくオレの部屋に置くことにした。

アンティークといえは聞こえはいいが、コイツに関して言えば、ガラクタと呼ぶほうがふさわしい。

あなろぐ。

ニスの剥げたケヤキの筐体、錆びた真鍮の金具。そんなものを眺めにナオミは毎週、水曜の夜にやって来た。眺めてうっとりする彼女の姿に、オレは首を傾げた。

なにがいいのか、わからない。

わからないけど火曜の夜は掃除のついでに、“あなろぐ”を乾拭きしてやった。

あなろぐ、えんばんくるくるかいてんき。

錆ついたラッパから、調子はずれの歌謡曲が流れ出す。

昭和30年代に流行ったらしい、あまり馴染みない曲。立てかけてあるエレキベースが泣いている。せめて8ビートにならないかな...

「そんな古くさい曲やめろ、あなろぐ」

すまないねえ。

歌謡曲のかわりに、志ん生の声が鳴り響いた。

なにがどう壊れたらそうなるのかわからないが“あなろぐ”は、いままでに鳴らしたことのある音を、時おり思い出し、唐突に再生し始めた。大抵は調子はずれの歌謡曲だが、ときどき落語や浪曲、クラシックやジャズが鳴り響いた。前の持ち主は、ずいぶんと多趣味だったらしい.....いや、何人もの主人に仕えてきたのか。

痴呆蓄音機は、レコードがないことを忘れて、音楽を奏でる。

真鍮のラッパから、静かなピアノ曲が流れてきた。

懐かしい、どこかで聞いた曲。誰の、なんの曲だったか思い出せない。映画に使われたんだっけ？

「なあ、あなろぐ。その曲のタイトルなんだっけ？」

あなろぐは応えない。ただピアノ曲を思い出し、身勝手に再生を続ける。

「モノクロだったっけ？ ...なー、なんとか言えよ」

あなろぐト短調.....。

曲が終わり、部屋に静寂がもどった。

結局、タイトルは出てこなかった。

あなろぐは、磨り減ったダイヤ針がついたアームを静かに、ゆっくりと上下に動かした。新しいレコードをねだっているようだった。

なー、あなろぐ。

いくらねだってみても、このアパートに、レコードなんてどこにもないんだ。

なー、あなろぐ。

レコードを持ってるナオミは、もう来ないんだ。

第一、今日は土曜の夜で火曜の夜じゃない。

そんな哀しいバイオリンの小品はかけるな。

せめて、8ビートにしてくれよ。

すまないねえ。

志ん生の声が鳴り響いた。

風に戦ぐ夏休み

風が強い。

公園のベンチに腰掛けた瞬（しゅん）は、いたずらに揺れ踊る前髪をかきあげ、大通りを眺めた。カラオケボックス、レンタルショップに歯科クリニック...立ち並ぶいつもの店が、早い時間からシャッターを下ろしている。

“台風8号は依然、強い勢力のまま北東に進行中、住民の方は注意が必要です。以下の地域に警報が...”

瞬はかすかに笑い、首からさげていたラジオの電源を切り、静かに目を閉じた。

頬を撫でる風。遠くで何かが倒れる音。いつ降り出してもおかしくない雨の匂い。強い大きな力が段々と近づいて来る。

世界が終末に向かっていくような空気。

湧き起こる焦燥感と緊張に、胸が高鳴る。

「そろそろ来るな、瞬」

目を開くと、自転車に跨った達也がニヤリと笑っていた。夏期講習の帰りらしく、帆布鞆を肩からさげていた。

「遅い」

瞬は不服そうに呟いた。達也が自転車から降り、肩を竦める。

「台風だから早めに終わって来てやったのに」

「武器は？」

「取りに帰ってる時間なんかない...オレの分も持ってるだろ？」

達也がベンチの下を覗きこむと、瞬はかすかに頷いた。

二本の金属バットを器用に足で引っ張り出し、一本を達也に手渡した。

「達也、その自転車は倒しといたほうがいい。一時間ぐらいで風がもっと強くなる」

轟々と風が響き、木々が荒々しく揺れ、電線がうねる。

瞬と達也は、転がってくるゴミ箱を蹴り、骨の折れたビニール傘を、バットで打ち落とす。駅前英会話のポスターが達也の顔に張り付こうとするのを、瞬が庇う。吹き溜まりのこの場所は、何が飛んでくるかわからない。酷いときだとペリカンの描かれた看板が大通りから、飛んでくる。

台風が通り過ぎるまでの戦い。この場所で凌ぐ、ただそれだけ。

通り過ぎるまで、そこにいられるなら、多少の擦り傷なんて気にならない。

風が止みだした。

瞬はゴミ箱を起こし、濡れた前髪をかきあげた。達也は自転車を立て、鞆をカゴに放りこんだ。

「最後に雨か」

「...問題集がずぶ濡れだ」

二人ともシャツの裾を絞りながら、笑い出した。

瞬が、ラジオのスイッチを入れる。

“台風8号は、先ほど日本海に抜けました。再上陸の恐れはなく...”

台風一過。瞬は夜空を見上げた。

“次に、新しく発生した台風9号の情報です。大型の台風9号は、早い動きで現在、北上しており

、明日にも本州に...”

淡々としたアナウンサーの声に、二人は、ごくりと唾を呑みこんだ。

眠らない羊飼

冷たい夜気が昼の喧騒から解放されて澄み渡り、耳をすますと遥か遠くの大気が揺れる音まで聞こえた。

静穏。しかし――、

大気の鳴動は次第に激しくなり、だんだんと近づき鳴り響いた。

それはもう、うるさいほどに。

どどどどどどどっ！

怒涛の地響き。

白く霞んでいた物体が、地平の彼方から猛烈な勢いでやって来た。

猛烈な羊の群れ。

羊が1匹、羊が2匹……羊が何千何百何十何万匹だ。

あっという間に町を埋めつくした羊は、シープドッグに追われ、無我夢中で逃げ回っている。

めえめえ。

群れに一頭だけいる黒羊に跨った羊飼いの青年が角笛を吹いた。

シープドッグが動きを変える。

ぽっぽこ、と羊が逃げ回る。アスファルトをカリカリ、ビルや民家に潜りこむ。

オフィスで、ぽっぽこ。

居間で、ぽっぽこ。

寝室に逃げこんだ羊が、寝ている赤ん坊の頭を軽やかに跳び越えた。

羊が1匹。

天井を眺めている不眠症の男の目の前を、

羊が2匹。

喉の渇きに目を覚ました女の横を、

羊が3匹。

ぽっぽこ、めえめえ。

黒羊に跨った青年は高層マンションの屋上に降りると、群れを見下ろしながら、シープドッグに命令を出した。羊の逃げていく方向を確認し、青年は黒羊の背から荷物を降ろした。海原の移動で汗臭くなった服を脱ぎ捨て新しいシャツに袖を通す。金盥の中に貴重な水を注ぎ、洗濯を始め、片っ端から干していく。

干し肉を齧り、引っ張り出した毛布を被りながら、読みかけの小説を開く。

青年が自由にできる時間は3時間しかない。3時間後には、群れとともに何千キロという距離をまた移動する。

「また、そんな格好で小説読んでる」

コートを羽織った女がマグカップを持って立っていた。青年は困った顔つきで女を見た。

「君のために羊を百頭も増やした」

「無駄だと思う。あなたがここに来るかぎり、私は眠らないから」

女はマグカップを青年に手渡した。青年は砂糖の入ったミルクに口をつけた。

「絶対、眠らせてやる」

「大好きなホットミルクを犠牲にしてでも？」

青年はマグカップに視線を落とした。砂糖入りのミルクが湯気を立てていた。

「それでも、君は眠らなきゃ」

黒羊が、めええと鳴いた。それが合図であるかのように、女は毛布に潜りこんだ。

「少しだけ、ね？」

耳元で囁く女の声に青年は頷いた。女は青年に頭を預け、いたずらに羊の群れを数えた。

羊が1匹、羊が2匹。

数え切れない羊たちは、町中にあふれかえり、草を食んでいた。

羊飼いの青年は、いつものように小説の続きを読み始めた。

改札を出て、変化に気づいたのは連れだった。

「気分悪いのか？」

唐突に聞かれた俺は首を傾げた。気分が悪いなんて言った覚えはない。どうしてそんなことを聞いてくるのかわからなかった。

「顔色悪いか？」

俺が訊ねると、連れは心配そうな様子で頷いた。

俺は駅の便所に行き、確認のため鏡を覗きこんだ。

見慣れた顔。別に青ざめた様子もない普通の顔だ。これで顔色が悪いと言われたら、ずっと顔色が悪いことになる。大きなお世話だ。

俺は安心し、笑おうとして、やっと気がついた。

表情が崩れない。

俺は鏡の前で固まった。

どうやら電車の中で、“表情”をすられたらしい。

「最近、多いんだよね、表情すられる人」

駅長室の奥の部屋で、俺は鉄道警察の担当官にそう告げられた。隣で連れが爆笑している。担当官はイスに座り、被害報告書をへらへら笑いながら、作成していた。

被害にあった人間を前にしてなにが楽しいのかわからなかったが、俺はムツとした感情を顔には出さず（あたりまえだ）に言った。

「返ってきますよね、俺の表情」

「むずかしいね。ほら、出てきてもそれが自分のだってわからないでしょう」

正論かもしれないが、俺は無表情のまま、拳を握り締めた。

「生活に支障が出るんですけど」

自然と強い口調になる。しかし、担当官は笑ったまま、「まあまあ」となだめ、足元のダンボール箱を俺のほうに差し出した。中に大小さまざまなチューブが入っていた。

「応急処置だけど、一つ持って行っていいから」

俺は箱からチューブを取り出した。

“しくしく（悲）”と書かれていた。

「なんですか？ これ」

「それ塗ると、悲しい表情が作れるようになるんだ。ラベルにそう書いてあるだろう？」

「つまり、悲しい表情限定？」

「そういう事。これなら“ムカムカ（怒）”で怒った表情だ」

「いろんな表情が作れるのは？ あったら、それがいいんですけど」

「あれはとても高いから、個人的に整形外科のほうで買ってもらうことになる……とりあえず、一番必要なのを一つだけ選んで、持って帰ってくればいいから」

一番必要な表情と言われても……。

俺は適当にチューブを一つ取り出した。すると、担当官が言った。

「それは評判が悪いみたいだ」

ラベルを見ると、“へらへら（笑）”と書かれていた。

なるほど説得力がある。

俺は別のチューブを取り出し、それを顔に塗りこんだ。

“やれやれ（落胆）”

隣で連れが爆笑していた。

ピアスの青年

コンビニの前で、店から出てきた一樹と目が会った。看板の明かりにピアスを光らせ、彼は気まずそうに視線をそらした。

早紀は転校してきたばかりの一樹に、どう声をかけていいのかわからなかった。いつも机に突っ伏して、誰とも打ち解けようとしなない彼は、教室で孤立することを選んでいたから。早紀は戸惑った。気づかないふりをしようかと思ったが、この距離では手遅れだった。

「今晚は、榊くん」

一樹がぎくりと体をこわばらせた。もしかしたら彼もやりすごそうと思っていたのかもしれない。観念したように顔を上げた。

「えっと...」

「小川、同じクラスの」

「...どうしたの、こんな時間に？」

いつもの制服姿と違い、一樹は黒のカットソーにデニムのパンツを穿いていた。ただそれだけなのに大人びて見えた。

「夏期講習の帰り。榊くんも塾の帰り？」

一樹は頭をふり、普段は見せない穏やかな顔つきで応えた。

「ここでバイトしてるんだ...親父の稼ぎだと、食えないから」

「ごめん、変なこと聞いた」

「別に」

一樹は短く呟き、歩き出した。後を追うつもりはなかったが、帰る方向が一緒なので少し間をあけてついて行く。お互いが意識する微妙な距離のまま。

耐え切れずに沈黙を破ったのは、早紀だった。

「バイトのこと知ったら、ナベの奴、残念がるかも。榊くんを勧誘しようとしてたから」

「ナベ？ 勧誘？」

突然の言葉に、一樹が振りむく。

「うん、ナベっていうのは渡辺のこと。クラスで騒いでる奴いるでしょう？ あいつ、陸上部の部長なの」

一樹が、思い出したように頷いた。

「で、ナベが言うには、榊くんの脚は、絶対、陸上向きなんだって。だから陸上部に誘うって言ったの。でも、バイトしてるんなら、無理だよな」

早紀の言葉に、一樹はもう一度頷いた。

「でも、やってみたいな...短距離やってたし」

「本当に？ 入部しなよ」

「けど、バイトあるし」

「相談したら？ 聞いてあげるよ」

一樹は首を横にふった。

「それぐらい聞ける」

少しはにかみ、白い歯を初めてみせた。

翌日、一樹が教室に行くと、誰が見ていたのか、早紀と一樹が、夜、二人きりで歩いていたことがスキャンダルになっていた。早紀が反論し、火に油を注いでいた。

口笛を鳴らし、一際囃し立てている奴がいる——ナベだ。

一樹は一瞥しただけで、何も言わなかった。

ただ、まっすぐ自分の席につき、いつもどおり机に突っ伏したまま、一樹はなにも言わなかった。

仙丹

靈佑山緋鷲洞の陋見普君（ろうけんふくん）が亡くなったという報せは、すぐに穿穴山禮水洞、壁銘真人（へきめいしんじん）のもとにも届いた。壁銘真人は天を仰ぎ一礼し、陋見普君の天寿を祝福した。兄弟子であった陋見の死に、壁銘は驚きも、悲しみもしなかった。しかし傍らで湯を沸かし、炉の番をしていた童子は違った。彼は大いに驚き、悲しんだ。

「師父、陋見老師がお亡くなりになられたというのは、本当ですか」

壁銘真人は、騒がしい童子をたしなめながら、頷いた。

「老師の身に何があったというのですか。あれほどお元気でいらっしゃったのに」

童子が仙道を学ぶため洞門をくぐってからこの方、仙人道士が亡くなるという報せは今までに聞いたことがなかった。仙人は不老不死であり、永劫生き続けるのだと童子は思っていた。壁銘真人は頭をふった。

「万極書卷（ばんきょくしょかん）が完成したのだ」

「万極書卷とは、なんですか」

「この世の始まりから終わりまでを書き記した書物のことだ。起こりえた全てのこと、起こりうる全てのことも書かれている」

「その書物と、老師の死がどのように関係するのですか」

その問いかけに、壁銘はじれったそうに再び、頭をふる。

「書卷の完成に伴い、師兄は仙丹を呑むのをやめたのだ。大仙といえど、仙丹を呑まなければ、寿命は尽きる」

「なぜ、老師は仙丹を呑まなくなったのですか」

「万極書卷を書き終えられ、師兄はその役目を終えられた。書卷を書くことは師兄の天数（運命）だったのだ。それを終えたのだから仙丹を呑む必要がない」

「それがなぜ仙丹を呑まず、死ぬことになるのです」

幼い童子には理解ができなかった。天数によって役目を終えた者が、どうして役目と同時に生きることがやめるのか。

「我々は、死ぬことを忘れていないわけではない」

壁銘真人は、眉間に深いシワを刻み童子にいった。

「果たすべきことを果たすために生きているのだ。ただ我々の場合、その果たすべきことが人間よりも少しばかり規模が大きい。そのため少し長生きをしているだけだ」

童子は唸り声をあげながら、炉にかけてあった鍋の湯を湯呑みに移した。熱湯を少し冷ましてから壁銘真人にさしだすと、壁銘は懐の瓢箪から仙丹をとりだし、自身と童子の掌にそれぞれ一粒ずつ置いた。

金色の丸薬はいつもより重かった。

童子は壁銘真人の傍らでしばらく仙丹を眺めていたが、やがて、鼻をつまんで呑みこんだ。

校門脇の自転車置き場から、校舎にむかって伸びる桜並木のひとつに腰かけた直哉は、鞆から文庫本を取りだし、ゆっくりとページを開いた。部活を終えたこの時間、陽は傾きはじめたが、まだ本を読むのに不自由のない時間だった。暖かい風が直哉の頬を通り過ぎ、桜の花びらが、寝ぐせの残る髪に着地する。

春眠暁を覚えず。

心地よい風に包まれた直哉は、ページを2、3度めくっただけで無防備な寝顔を見せ、かすかな寝息をたてはじめた。瑞穂の部活が終わるのを待つ時間。そんなわずかな時間でさえも成長期の体は眠りを欲しがり、スイッチが入ったように睡魔に降伏する。女子バスケット部は、直哉のブラスバンドよりも熱心だったから、新年度になってから直哉はなんども瑞穂に起こされ、からかわれた。ロボットじゃないんだから、と。でも、自転車置き場から少しはなれたこの場所は、木の陰に入ってしまうと人目につかないし、なにより色づく桜の花びらがきれいだったから、直哉は、つつい油断してしまい、眠りの世界に落ちた。もしかしたら、霞につつまれたような別世界がそうさせているのかもしれない。

春眠暁を覚えず。

唇に春風が触れた。生暖かいとけるような甘い感触。その感触はしばらく続き、眠っていた直哉は目を覚ました。

「おはよう、直哉」

目の前に瑞穂が座っていた。部活が終わったばかりだからだろうか、彼女の頬は桜色に染まっていた。いつもは見せない少し緊張したようすに、なぜだか直哉の頬も上気し、鼓動が早くなった。いまの感触はもしかして……。

「おは、よう」

ぎこちなく返事を返すころには、耳の先まで赤くなっているのがわかった。手がかりは、唇に残っている感触だけ……でも、それで十分だった。

今までに感じたことのない予感。新年度、新学期……わかりきったことだけど、なにもかもが新しく始まりだす。ぴかぴかで、わくわく胸躍り、そして、少しだけ怖いような感覚。

直哉は木にもたれかかっていた半身を起こし、瑞穂に顔を近づけた。そして、そのまま、静かに唇を重ねた。

そう、この感触。まちがいない。

だから、ふたりの時間はそのまま、しばらく静止した。

心地よい風に包まれたまま、桜の木の下で。

魔法使いレイリー・ロット

レイリー・ロットは有名だった。

酒場“愉快的ゴブリン亭”の片隅でジンを舐めている彼は、まだかけだしの魔法使いで、冒険の経験はあまり多くはなかったが、知らない者はいなかった。

その理由は、くしゃみだ。

彼はくしゃみをするたびに、途轍もない魔法が使えた。くしゃみの勢いを利用すれば彼はなんでもできた。

ダンジョンの最深部でモンスターに囲まれたときも、レベル100のミミックに襲われたときも一発、くしゅん、で片づいた。

だが、いつもそんな都合よくくしゃみが出るとは限らない。一月前のクエストでは、くしゃみが出ないせいでグリズリーの昼飯になりかけた。

以来、レイリーはコショウのビンを常に持ち歩いている（といっても今度、グリズリーにあつたら、自分で塩コショウしてあげようというのではない）。

だが、コショウは値段が高い。かけだしの魔法使いがほいほいと使えるような値段ではなかった。彼はコショウ以外の対策として、常にパンツ一枚の格好で過ごした。

「あんたが、レイリー・ロットだな」

レイリーが顔をあげると、鎧に身を包んだ男が立っていた。一目見て戦士系だとわかる男だった。小さくうなずくと、男は話を続けた。

「仕事を頼みたい。イル氷原の奥にあるという伝説の剣を取りに行く。オレのパーティーに加わってくれ」

男が提示した報酬額は、申し分のないものだった。レイリーはふたたび小さくうなずいた。交渉成立後、鎧の男はいった。

「その格好で行く気か？」

「そうだ」

「服を着たらどうだ」

「……」

「氷原は寒いぞ」

「……」

「風邪をひくぞ」

「……」

「なんとかいったら、どうなんだ？」

「……オレは風邪をひきたいんだ！」

だが、かなしいかな、レイリーは風邪らしい風邪をひいたことがなかった。パンツ一枚でイル氷原にむかっても、彼は元気そのものだった。エリアボス“冬将軍”のところにたどり着いても、鼻水ひとつ垂れてこない。窮地だ。レイリーはやむなくコショウを使うことにした。だが、しかし――、

ふたが凍りついていて、あかない！

レイリーは青ざめた。

一方、そのころ、“愉快的ゴブリン亭”。

「あれ？ マスター。アイツは？ いつもコショウのビンを横に置いてる裸の変態魔法使い」

「レイリーかい？ クエストに出かけたよ。今ごろ、イル氷原じゃないかな」

「あの格好でかい？ よくやるよ」

くしゅん！

レイリーたちは無事、伝説の剣を手に入れることができた。

雨傘警報

いつもの19:42発の電車に乗りこんだ私は、7人がけのシートの端が空いていたので、そこに腰掛けた。手にしていた傘を手すりに引っ掛け、忘れないよう、念には念を入れ、小さく指差し確認をしてから、腕を組み、電車が動き出すのを待った。

立て続けに2度、傘を置いてきたのは、まずかった。

手すりの傘に目をやりながら、私は思った。

1度目は、父の日にプレゼントしてもらったブランドの傘だったので、嫁と娘からブーイングの嵐だった。せっかく二人で選んだ傘だったのに、と未だにチクリと言われることがある。反論したくても、自業自得なので、黙ってやりすごすしかない。2度目がなければ、傷は浅かったかもしれないが、翌日、予備の傘で、同じことをやらかしてしまったから、もうどうしようもなかった。

「ボケたんじゃないの？」

とは、嫁の冷たい感想だ。失敬な、誰がボケたりするものか。ボケていたら、こうして仕事ができるわけないだろう。お得意さんの名前はもちろん、顔や趣味、特技だって、きちんと覚えているし、各営業所の電話番号だって、全部見ずにかげられる奴はなかなかいないんだ。今度のゴルフコンペの人選だって、私の意見で決まったようなものじゃないか。セッティングからなにから段取りごともうまくいっている。営業畑で25年やってきたのは伊達じゃないんだ……そういえば、総務部長も今年で勤続25年か。あそこも今年、孫が小学一年生になると言っていたな。ランドセル、どんな色にするのか決まったんだろうか。うちの孫はライトブルーがいいと言っていたが、やはり無難に黒のほうがいいんじゃないだろうか。それとも意表をついて黄色とか派手な色でいくんだろうか。目立つのは結構だが、いじめられたりしないか心配だな。そもそも24色もあるのが、けしからん、贅沢だし、迷う原因になる。クレパスじゃあるまいし。24色のクレパス。そういえば、神田川にそんなフレーズあったな。最近、あんまり聞かなくなったけど、久しぶりにCD出してかけてみるか。あれ、専務の十八番だったよな。懐かしいなあ。ん、専務とカラオケ行ったの、いつだったっけ……あ、そうそう、山形に出張行ったときだった……。

気がつくやうに、電車がすでに降りる駅に停まっていた。

私はあわてて、閉まりかけた電車から飛び降りた。

案の定、私の手には傘がなかった。

私は意味もなく、動き出した電車の手すりに向かって、小さく指差し確認をした。

確かに傘はきちんと、そこにあった。

旅の終わりに聞く話

私は旅人だった。人生の大半を鉄道の旅に費やし、車窓からの眺めを楽しんできた。新緑の美しい溪谷や、機械仕掛けの町、一瞬にして燃えるような赤へと紅葉する山（それは本当に山火事のような勢いだった！）、そして一面雪化粧された白一色の国……車窓に飛びこんでくる未知の景色は、私の好奇心を大いに満たしてくれた。だから私は旅をいつまでも続けた。そう、旅はいつまでも続くかに思われた。だが……。

気がつくとは私は地の果てに作られた終点の駅に立っていた。

駅は作られたばかりでなにもない。線路と終点を記す表示板と、三人がけのベンチだけが置かれていた。ここから線路が伸びていく様子は当分なさそうだった。世界中の鉄道に乗り、行き着いた終着点に私は落胆し、ベンチに腰をおろした。何十年もかけた鉄道の旅が、まさかこんな形で結末をむかえようとは思っていなかった。もっと想像を絶するような文化を持った町や国、心奪われるような自然の景色、なにかそういうものが待っていると思っていた。それなのに、ここには私の期待するものがなにもなかった。

「どうしたのですか？ ずいぶんガッカリされているようですが」

うなだれている私に誰かが話しかけてきた。ふりむくと銀髪の男が、となりに座っていた。旅人特有の雰囲気漂わせたその男は、静かに笑いかけた。

あまりに突然のことだったので私は男の問いかけに答えず、逆に訊ねた。

「あなたは旅人ですか？」

銀髪の男はうなずいた。

「だったら、あなたにもわかるはずだ。ここが旅の終点で、ここから先がもうないことも」

私は心の内にたまっていた不満と不安を、男に打ち明けた。同じ旅人ならわかってもらえる、そんな思いが私を饒舌にした。いままでに訪れた旅先での感動がもう味わえないことを私は長々と話した。彼は黙ってうなずき、話を聞いていた。

「残念だとは思いませんか？ もうこの世界に未知の場所はないのです」

その言葉に男は頭をふった。

「それはちがいます」

「ちがう？ なにがちがうんです」

私の問いかけに、男は哀しそうな顔をし、ためらいがちに口を開いた。

「見たことのない景色が見たいなら、ここから列車に乗って、来た道をもどりなさい。そうすれば、あなたの望みはかないますよ」

「そんな馬鹿な、今来た道を引き返すだなんて」

「でも、それが真実なのです。おすすめはしませんが……それよりもいかがですか、私と一緒にここで新しい駅ができるのを待ってみては？」

この男はなにをいっているのだろうか？ そんないつになるかわからない話に賛成なんかできるわけがない。同じ場所でじっとしているのが嫌だから、私は旅人になることを選んだのだ。同じ場所で同じことを繰り返すくらいなら、たとえ見慣れた景色でも鉄道の旅を続けているほうがいい。

私は銀髪の男の申し出を丁重に断り、折り返し発車する列車に乗りこんだ。

車窓には、来たときと同じ景色が流れた。

見慣れたごく平凡な風景だった。だが、進んでいくうちにその風景は徐々に変化を始めた

。

季節が移り、時が流れるにつれ、車窓の風景は来たときとはちがうものになっていた。

雪化粧をしていた国の雪はとけ、むき出しになった工場が灰色の煙をあげている。一瞬にして燃えるような紅葉を見せてくれたあの山はハゲ山になり、ニュータウンがたっている。機械仕掛けの国は、歯車の噛みあわせがおかしいのか、異様な音を響かせていた。新緑の溪谷は、ダムの中だった。

それは未知の世界だった。私が何十年とかけて旅してきた場所は、すべて未知の世界へと変わり果てていた。私の生まれ育った国は、今ごろどうなっているのだろう。

私は車窓の景色を飽きることなく眺め続けた。

とめどない涙が、いつのまにか溢れ出していた。